

壺の碑 (つぼのいしぶみ) Memo

1、「壺の碑」は、古来、歌枕（後世専ら名所を言う）として有名だったようです。

西行(1118～1190) 山歌集では、

●陸奥の おくゆかしくぞ おもほゆる 壺の碑 外の浜風 (山歌集)

(陸奥のその奥がもっと見たい、聞きたい、知りたいと思われるよ。壺の碑とか外の浜を吹く潮風とか)

又、古語辞典(旺文社版)いしぶみの説明に次の歌がある。

●陸奥 (みちのく) の いはでしのぶは えぞしらぬ かきつくしてよ 壺の碑 (新古今集 源頼朝)

(陸奥のいわで、しのぶの地からは、蝦夷地が分からぬのと同じように手紙にきっちり書いて下さらぬとわかりません。壺の碑に彫るのとは違うのですから)

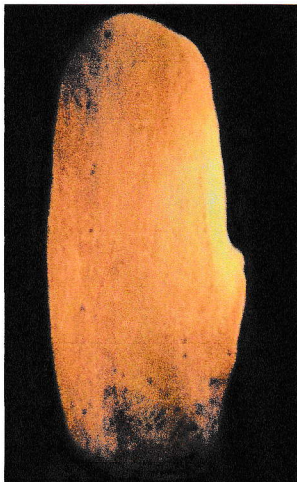
2、上記、西行の歌からは、外の浜という、津軽半島の浜の名称がでてきており、壺の碑は、未知なる陸奥の象徴として歌われてきたようで、実際現物はどこにあるのか、長い間不明であった。ところが、江戸時代に入り、宮城仙台の多賀城で土中から掘り出されたのが、左記写真の碑でした。



3、この碑は、奥の細道では、芭蕉が訪れた元禄2年(1689年)当時、添付資料2にあるように、『苔を穿ちて文字幽也』となっていたことが分かります。又芭蕉は、この碑の前に立ち、『泪もおちるばかり也』とまでに記しております。後世この多賀城の碑が、壺の碑と称されるようになっていったようです。

4、一方、黄葉園随筆では、原文にあるように『多賀城の門碑にて、壺の碑にあらず』と断言し、後世取り違えたのだと喝破しております。残念ながら原文では、何故そう思ったのか詳しく書かれていません。

5、ところが、昭和24年に、青森県上北郡東北町で、石碑が発見され、そこには、『日本中央の碑』と彫られており、発掘当初から平安時代の征夷大將軍・坂上田村麻呂が文字を刻んだとされる、幻の『壺の碑』ではないかと大きな話題を集めました。現在、この碑は、東北町で、「日本中央の歴史公園」として整備され、その資料館に保存展示されているとのこと。



又、この碑は、発掘以来その真贋を巡って決着がついていないとの事です。

(左の写真：日本中央(ひのもとのまなか)と彫られている碑)

御伽草子に『陸奥の壺の里の大石』という話もあり、興味がつきません。

◎全く、歴史の事象は、面白いものですね。今度宮城・青森を訪れる機会あるときは、両方の碑を見たいものです。 (文責：今井)